

マジックインキ

「魔法の筆記具」「？」

「ちょっとそこのマジック取って？」・・・と普段何気なく言っているが、「マジック」だけで通じてしまうほど「マジックインキ」は日常生活の中に溶け込んでいる。ガラス瓶に芯をつけたような独特な形状は、発売時からまったくかわっていない。



<p>商品開発の背景舞台裏</p>	<p>「紙や木だけでなく、ガラスやどんなものにも良く書いて、すぐ乾き耐水性のある魔法の筆記具」という宣伝文と「？」のマークのパッケージで、「マジックインキ」は昭和52年（1952）試験的に発売された。</p> <p>この商品の開発に着手したきっかけは、海外視察団が持ち帰ったアメリカのマーキングペン。それを見て、将来性を確信したという。早速開発にとりかかったが、持ち帰った見本は中身が乾燥して成分が分からず、溶剤や接着材、染料、密閉容器、インキの流れが良く適度の筆触を持ったフェルトの開発など、難題が山積していた。それらをひとつひとつ解決し、ようやく開発から3年目で販売にこぎつけた。</p> <p>昭和53年に本格的に販売活動を開始するが、ほとんど見向きもされなかったという。当時、筆記具といえば、鉛筆・万年筆・筆墨が中心で、デパートで実演販売 をしても、マジックインキは1日に2～3本しか売れない。売れなかった理由として、価格が80円もした。現在、120円 で安いところでは85円くらいで購入できる、ということは今の値段と ほとんど変わらないということ。普及するまで、多難な時代が続いた。</p>
-------------------	--

<p>梱包革命</p> <p>すぐ書けなくなる</p> <p>文具の主役</p>	<p>急激に売れ出したのは、4～5年後の昭和57年ごろから。人気漫画家などがマジックインキで漫画を描くなどして、宣伝に一役買ったこともあるが、実際は経済成長に伴い物資の輸送用梱包が、木箱から段ボール箱に変わるといふ「梱包革命」が大きかった。段ボールに最適な筆記具として重宝がられた。</p> <p>その後マジックインキはオフィスから学校、家庭へと瞬間に普及していったが、その一方で利用者から「すぐ書けなくなる」という苦情が続出した。筆や万年筆などのこれまでの筆記具は、すぐに乾くことはない。その習慣から、使用者は使い終わってから、すぐにキャップを締めなかった。まずその習慣を改めねばならなかった。</p> <p>黒・赤・青の3色セットでスタートしたマジックインキは、その後16色セットになり、デザイナー用には128色セットもある。ペン先も、発売以来続いている8ミリ幅を中心に、0.5ミリから18ミリまで豊富に揃っている。</p> <p>文具店のマーキングペンのコーナーは、油性や水性インキのペン、蛍光色ペン、不透明で厚塗りできるものなど、色とりどりのペンが並べられ、いまや文具の主役の感がある。</p>
--	---

昔、学校の授業の発表会や文化祭などで、模造紙にマジックインキで書いていたことを、懐かしく思い出した。

いろいろなやつがいた。

- ・普段あまり字がうまくないのに、マジックインキで書くとなぜかうまいやつ。
- ・線をキーキーと不快な音をさせながら書くやつ。
- ・いい臭いだなあ・・・と、やたら臭いばかりかぐ危ないやつ。
- ・キャップを締めずに、すぐ書けなくするやつ。
- ・線を引く時、模造紙を折って折り目に沿って引いたり、鉛筆で下書きをする几帳面なやつ ……………。